

# 言語学における言語用法の位置づけ

中 園 篤 典

(受付 2001年10月11日)

## 1 はじめに

言語学はその研究対象を言語記号から意味へと拡大してきたが、近年では言語使用者までをその分析の対象に取り込み始めている。それに応じて統語論と意味論が整備されてきたが、本稿で扱う語用論はその延長線上に位置づけられる。

現在の言語学では、異なる言語を別々に説明するのではなく、統一的に説明する事によって、人間言語の普遍性とそこから導かれる個別性を同時に捉えようとしている<sup>1)</sup>。統語論の分野では、言語構造の普遍性と個別性に焦点を当てて研究を進めているが、人間の言語使用を扱う語用論の分野でも、同じように言語使用の普遍性と個別性をとらえようとする方向で理論化を進めるべきであると思う。

本稿では、その言語使用の問題として引用文におけるダイクシスの表現を取りあげ、これを機能的に説明するためにはどのようなやり方があるのかについて考察していきたいと思う。

## 2 語用論の目的

### 2-1 言語構造の研究

言語学の主要な部門である統語論の目的は、我々が自分の母国語をいか

---

1) 普遍性の概念には、言語類型論が仮定するような範疇的な普遍性と、生成文法が仮定するような心理的実在としての普遍性がある。ここでは、動詞、名詞、主語、直接目的語などの範疇が人間言語に普遍的にみられるという類型論の普遍性を想定している。

に話し理解するのかを表した規則の集合をつくる事にある。ただし、世界には分析の対象となる言語の数が二千余から五千余も存在するのであるから、このような作業を行うときに問題となってくるのは、どのようなやり方でその記述を行うのかという点である。異なる複数の言語を念頭におきながらそれらを説明しようとするとき、興味の持ち方として「個別指向」と「一般指向」という二つの観点があると思われる。

個別指向の観点では、それぞれの言語を独立した存在と見なし、別々の体系として説明しようとする。そこでは研究対象をある特定言語にしぼり、それだけを詳細に記述し公式化する事を試みる。国語学という分野などは、この観点に立ったものである。

このように、言語を個別指向で考察する人々の中で、三上 (1953) は、ある特定言語で設けられた範疇をそのまま別の言語に応用する事の危険性を指摘している。三上 (1953) の主語廃止論は、主語という概念をヨーロッパ語に特有の概念であると主張する。例えば、次の (1) では“who”が主語となるが、英語ならば一致 (agreement) という現象から、どんな述語にも主語を認める事ができる。

(1) Who needs lots of money ?

しかし、日本語のように主語と述語の間に一致を持たない言語では、「いる」のような状態述語において主語の認定が困難となる。例えば、次の (2) では、英語のように、「誰に」を主語と認定するための積極的な証拠は存在しない。

(2) 誰に 沢山のお金が いるの ?

三上 (1953) は、英語では主語や目的語といった文法関係が本質であるのに対し、日本語では与格や主格といった格関係が本質であると述べている。この「日本語に主語は存在しない」という主張は、言語の記述は相互

不干渉で行われるべきだという個別指向の立場から導かれる結論である。

ところが、一般指向の観点では、異なる複数の言語を統一的に説明しようとする。ここでは、たとえ表面的に多様であっても、人間言語には共通性や普遍性が必ずあるという仮定が出発点となっている。このような立場に立つ人々が最も興味深いと感じる現象は、関連のない言語や文化に属する人々の発話が言語学的な細部において類似しているという事実である (Brown and Levinson 1978)。言語間にみられる差はランダムなものではなく、言語はある決まった範囲内でしか変位しない。そこで、さまざまな個別言語を集めて突き合わせる事で、それらが共有している普遍性を抽出しようとするのである。

統語論の分野でこのような普遍性を追求した例には、日本語の中にも主語という範疇を認めようとする柴谷 (1978) の研究がある。柴谷 (1978) は、文の述部を尊敬語化すると敬意の対象が主語に当てられる点に注目した<sup>2)</sup>。この現象を (2) の文に当てはめてみると、次のように敬意の対象は与格としてマークされている「誰に」にあたる。

(3) 誰に 沢山のお金が おいりになるの。

だから、一見すると主語がないように見える (2) の文も、尊敬語化現象によって与格を主語として認める事ができる。その結果、英語にも日本語にも主語・述語という文法関係を認める事ができ、二つの言語の間に存在する共通性を捉える事ができる。ただし、英語では「主格・対格」の配列であるのに対し、日本語では「与格・主格」の配列となる事実から、格関係に関しては英語と日本語の間に差のある事が分かる。したがって、これは言語間の普遍性を探求すると同時に、個別性までも説明するモデルである

2) 柴谷 (1978: 186) では、主語の統語的特徴づけを次のように行っている。(a) 尊敬語化現象を誘発する。(b) 再帰代名詞化現象を誘発する。(c) 特定の述語を持つ文以外で、題目化されない文では主格助詞「が」を伴う。(d) 存在文でない文では基本語順において文頭に来る。

といえる。

(4) Who needs lots of money?

[主語・主格] [目的語・対格]

(5) 誰に 沢山のお金が いるの?

[主語・与格] [目的語・主格]

このように、異なる言語を統一的に説明するという一般指向の観点に立つ事によって、人間言語の普遍性とそこから導かれる個別性を体系的に説明する事ができる。上でみたように、統語論の分野では、特に言語構造の普遍性と個別性に焦点を当てて研究を進めている。最近になって注目を集め始めた語用論は、人間による言語使用を分析する分野であるが、ここでもやはり一般指向の立場に立って分析を進めるべきであると思う。つまり、人間による言語使用 (language use) の普遍性と個別性の研究である<sup>3)</sup>。

## 2-2 言語使用の研究

見知らぬ人に時間を聞くとき、常識的な人間ならば (6) のような直接的な聞き方をせず、(7) のような間接的な聞き方をするのが普通である (Brown and Levinson 1978: 64)。

(6) "Tell me the time."

(7) "You could not by any chance tell me the time, could you?"

---

3) Brown and Yule (1983) は、語用論を三つの分野に分けている。第一は、言語伝達機能の計算方法を研究する分野であり、Austin (1964) や Searle (1969) の発話行為論や、Ross (1970) の遂行仮説がこれに含まれる。第二は、社会・文化的知識の利用方法を研究する分野であり、フレーム、スクリプト、シナリオ、スキーマなどの概念が提出されている。第三は、推論の決定方法を研究する分野であり、Grice (1957) の非自然的な意味や Bach and Harnish (1979) の "communicative-intention" や "reflexive-intention", Sperber and Wilson (1986) の関連性の理論などが含まれる。

では、なぜ (6) ではなく (7) のように聞くのだろうか。これを慣習 (convention) の問題とすると説明としては簡単であるが、それではなぜこの傾向が英語だけでなく日本語など他の言語にも同じように表れるのかという事実を説明できない。

語用論では、そのような慣習の背後に存在する合理的な理由を考える事によって、複数の言語の間にみられる偶然以上の普遍性を捉えようとする。統語論の分野でも言語文化的な相対論は否定されているが、語用論の分野でもそれは否定される必要がある。そして、表面的な差の背後に存在する普遍的な原理を明らかにしつつ、なおかつ言語間の差もその原理によって関連づけられるようなモデルを作る事が語用論の目的である。

語用論の分野で、このような言語使用の普遍性と個別性を探求した例には、ブラウンとレビンソンによるフェイス (face) の研究や (Brown and Levinson 1978)<sup>4)</sup>、リーチによる丁寧さの原理 (politeness principle) の研究 (Leech 1983) などがある。

例えば、英語話者が人にクッキーを勧めるとき、(8) のような言い方をするのが普通であるが、日本語話者なら (9) のような言い方をするのが普通である。

(8) "Let's have another cookie then."

(9) 「もう1つ食べませんか？」

(8) と (9) の差は、(8) が相手との一体感を強調する事によってクッキーを勧める表現であるのに対し、(9) はクッキーを取るか取らないかの

---

4) Brown and Levinson (1978: 66) は、社会の構成員ならば必ずフェイスを持っているとした上で、フェイスを次のように定義している。フェイスとは、すべての構成員が自分のために主張したい自己認識 (self-image) であり、次の関連する二つの側面がある。(a) 否定的なフェイス: 自分の縄張りや個人の領域、侵害されない権利に対する基本的な主張。つまり、行動の自由や侵害からの自由など。(b) 肯定的なフェイス: 自分が他人に正しく評価されたい、認められたいという欲求を主に含んだ肯定的、調和的な自己認識。

選択を相手に任せる表現であるという点にある。この差を慣習の問題として片づけてしまうのは、言語を個別指向で研究する人々の考え方である。しかし、言語を一般指向で研究する立場では、その慣習の背後に存在する普遍的で合理的な基礎を捉えようとする。例えば、ブラウンとレビンソンはすべての人間が共通してフェイス (face) と呼ばれる自己主張 (self-image) を持っているとは仮定する事によって、上の事実を統一的に説明しようとしている。

まず彼らは、フェイスには自分の領域を侵害されたくないとは主張する否定的なフェイス (negative face) と、自分の領域を相手のそれと一致させたいとは主張する肯定的なフェイス (positive face) がある<sup>5)</sup>。対人関係において相手の領域に近づかないという言語行動は、相手の否定的なフェイスに配慮した結果である。また、相手の領域に入っていくという言語行動は、相手の肯定的なフェイスに配慮した結果である。このようにフェイスを二種類に分ける事によって、丁寧さ (politeness) という概念を、否定的な丁寧さ (negative politeness) と肯定的な丁寧さ (positive politeness) に区別する事ができるのである (Brown and Levinson 1978)。

クッキーを勧めるとき、英語で (8) のように肯定的なフェイスに配慮した表現が多く用いられるのは、英語話者が文化的に肯定的な丁寧さを優先させるからである<sup>5)</sup>。一方、日本語で (9) のように否定的なフェイスに配慮した表現が好まれるのは、日本人が文化的に否定的な丁寧さを優先させるからである。このようにブラウンとレビンソンは、フェイスという欲求 (want) が人間の中に普遍的に備わっていると仮定した上で、異なる文化に属する人々の間にみられる言語使用の個別性を、それにもとづいて統一的に説明しようとするのである。

同じようにリーチの理論も、人間による言語使用の普遍性と個別性を、丁

5) ただし、“Will you come to the party.” と “Won’t you come to the party.” を比べると、後者の方が丁寧な勧誘となる。また、日本語にはフェイスがないとする Matsumoto (1988) の主張もある。

丁寧さの原理 (politeness principle) を仮定する事によって追求しようとしている。丁寧さの原理とは「対人関係の上で相手の感情を害するな」という大前提であり、これを実行するために、具体的には次の五つの原則 (maxim) が立てられている (Leech 1983)<sup>6)</sup>。

- (10) a. 気配りの原則 (The Tact Maxim)
- b. 寛大さの原則 (The Generosity Maxim)
- c. 賞賛の原則 (The approbation Maxim)
- d. 謙遜の原則 (The Modesty Maxim)
- e. 合意の原則 (The Agreement Maxim)

リーチは、これらの原則がどのような文化に属する人々の中にも共通して備わっていると考える。ただし、この中でどの原則を優先するかによって、言語の間に差が生じると考えるのである。例えば、お客にクッキーを勧めるとき、英語話者は (11) のような言い方を好んで用いるのに対し、日本人の場合は (12) のような言い方をするのが普通である。

(11) “Have as many as you like.”

(12) a. 「おひとつどうぞ……」

      b. 「何もありませんがどうぞ……」

上のように謙遜の原則と寛大さの原則が競合したとき、英語では寛大さの原則が優先されるため、(11) のような気前のいい表現が好んで用いられる。一方、日本語では謙遜の原則が優先されるため、(12) のような控えめな表現が好まれるのである。このようなリーチの理論も、言語使用に関する普遍的な原則と同時に個別性も説明しようとする点で、語用論の有効な

---

6) 気配りの原則とは、相手の負担が最小になるように配慮するというものである。次に、寛大性の原則とは、自分の負担が最大になるように配慮するというものである。賞賛の原則とは、相手への賞賛を最大にするというものである。謙遜の原則とは、自分への賞賛を最小にするというものである。また、合意の原則とは、相手との意見の違いを最小にするというものである。

モデルであるといえるだろう。

### 3 理想化の必要性

#### 3-1 構造的理想化

言語の形式化を進める統語論や意味論を、ここでは「構造的観点」と呼ぶ事にしよう。そして、これら構造的観点によって解明された形式が、具体的にどのように使用されるのかを研究する語用論は、構造的観点に対して「機能的観点」と呼ぶ事ができるだろう。

構造的観点と機能的観点は裏表の関係にあり、構造的観点(統語論・意味論)が前提としている仮定は、機能的観点(語用論)でも前提として認める必要がある。ここでは、まず構造的観点到った研究がどのような前提の下で進められているのかを概観した上で、それが機能的観点とどう関係するのかについて述べたいと思う。

構造的な観点到って研究を進めている生成文法 (generative grammar) の分野では、言語の研究が次の三分野から構成されるとしている。

- (13) 言語に関する知識は何から構成されているか。
- (14) 言語に関する知識はどのような方法で習得されるか。
- (15) 言語に関する知識はどのように使用されるか。

ここでいわれている言語に関する知識 (knowledge of language) とは、ネイティブ・スピーカーが自分の母国語について持っている知識の事であり、これらを運用する能力を言語能力 (competence) という。この言語能力は、さらに文法的能力 (grammatical competence) と語用的能力 (performative competence) に区別される。ここで、次の発話が二つの言語能力と、各々どのように関わるのかを考えてみよう。

- (16) "Today was a disaster."



まず、文法的能力とは言語構造に関する直観を与える能力であり、(16)のような音声表示から「今日は災難だった」という意味表示を得る能力がこれにあたる。また、(16)の発話者が今日講義を行ったという予備知識を利用して、「おそらく講義に失敗したのだろう」と解釈する能力は、聞き手に語用的能力が備わっているからである。さらにこの事は、一つの発話から得られる意味には二種類ある事を意味する。一つは文法的能力が想定する意味であり、これは文字通りの意味 (literal meaning) と呼ばれている。もう一つは語用的能力が想定する意味であり、これは意図された意味 (intended meaning) と呼ばれている。

構造的観点に立つ意味論では、その文自体がどんな意味を持つのか (What does the statement mean?) という問題を考察しようとする。これは、文脈から独立した言語それ自体の意味の研究 (a study of meaning within the language itself) である。したがって、構造的観点が扱う言語能力は文法的能力の方であり、考察の対象は文字通りの意味だけである。さらに、このような文字通りの意味を研究するために、構造的観点では捨象 (abstraction) という概念が重要視されている。

例えば、完全に等質的な言語社会の理想上の話し手や聞き手を対象とするという仮定の上に立つ生成文法では、核心文法 (core rule) と周辺文法 (peripheral rule) の区別を重視する。核心文法とはパラメータが決定された直後の無標の個別文法であり、普遍文法に直結する先天的な知識である。一方、周辺文法とは核心文法につけ加えられる有標の規則であり、借用による規則や地域差、年代差など後天的な知識である。

人間の脳は様々な要素の複合体 (モジュール) であるが、そのような脳から核心的な知識だけを研究するためには、不純物 (有標部分) を切り捨てなければならない。したがって、統語論では地域差や年齢差などの周辺の知識を取り除いて行けば、等質的な文法能力にたどりつけると考える。このような理想化 (idealization) は、構造を研究する際に前提となる条件である。これら構造的観点で研究する際の前提は、その使用を考える機能的

観点の分野にもそのまま当てはめる事ができると思われる。

### 3-2 語用の理想化

機能的な観点に立つ語用論では、人間によって観測されて初めてその発話は意味を持つ (What do you mean by the statement?) と考える。これは文脈における言語の意味を研究しようとする立場 (a study of meaning in relation to speech situations) であり、言語を人間から切り離された抽象物とした構造的観点に対する問題提起となっている<sup>7)</sup>。

機能的観点は、人間の語用的能力を扱う分野であり、考察の対象は意図された意味まで含まれる。したがって、語用論は言語学に対して、言語観の根本的な変更を迫っている。そこでは、構造的観点の枠組みでは問題とならなかった要素が、新たな研究テーマとして浮かび上がってくる。例えば、次のような発話は構造的な観点だけでは扱いきれない。

- (17) a. 昨日ここで雨が降った。
- b. 私は君が嫌いだ。

(17a) の発話を理解するためには、現在の時点や場所が判明していなければならない。また、(17b) では話し手や聞き手が誰なのかという情報が必要である。このように、現実的な発話を理解するためには、語用論的な要因が解明される必要があるのである。

ここで問題になるのは、これら語用論的要因をどのような枠組みで分析すべきかという点である。統語論の枠組みによってこれらを説明しよう

7) 意味論 (semantics) の想定する意味は (meanings), [X means Y.] である。一方、語用論 (pragmatics) の想定する意味 (meanings) は, [S means Y by X.] である (Leech 1984)。両者が想定する意味の違いは、次のような比喻でとらえる事ができるだろう。地球上に一冊の本だけ残して人類が絶滅してしまったとき、意味論の立場では、人間がいようがいまいが、その本はそれ自体で独立して意味を持ち続けると考える。しかし、語用論の立場ではその本を観察する人間が消えてしまえば、それと同時に本の意味も消えてしまうと考える。

として破綻した例に、ロスの遂行仮説 (performative analysis) がある (Ross 1970)。ロスは、話し手 (S) や聞き手 (H) という語用論的な要因を統語的に深層構造に仮定しようとした。

- (18) a. 自分はどう思います。  
b. [Sは「自分はどう思います」と言った]

これは、(18a) のような単文を深層構造のレベルで、(18b) のような複文として扱う事を意味する。このように考える事で、(18a) のような単文と次の (19a) のような複文の共通性をとらえる事ができる。つまり、単文と複文は表面的には異なるが、深層のレベルでは同じ構造として扱う事が可能なのである。

- (19) a. 私は自分はどう思うと言った。  
b. [私は「自分はどう思う」と言った]

ただし、この遂行仮説はかつて生成意味論の分野で支持されたものの、現在の言語学ではほとんど採用されていない。現在では、話し手や聞き手などの語用論的な要因とそれに関わる言語使用の問題を、統語論の枠組みで説明する事はできないという考え方が主流となっている。そこで、これら語用論的な要因を扱うために、構造的観点とは違った様々な枠組みが提案されている。

その中で言語使用の普遍性と個別性を理論的に説明するという点を最も中心に据えているものに、ブラウンとレビンソンの研究がある (Brown and Levinson 1978)。構造的観点で理想化という前提が重視されている事はすでに述べたが、彼らは言語使用を研究する語用論の分野でも、同じような理想化が必要であると述べている。これは、使用の中にも無標の核心的な使用と有標の周辺的な使用を仮定できる事を意味する。

核心的な使用を分析するためには、文脈を理想化し不純物を切り捨てる事によって、周辺的な使用を排除しなければならない。そのために、彼ら

は言語の使用場面において理想化された人である MP (Model Person) を仮定している。MP とは、その言語が堪能で、さらに合理性を備えた人間を意味する (Brown and Levinson 1978)<sup>8)</sup>。

ここで当然生じる疑問に、現実の対話の参加者が合理的であると本当に仮定してよいのかという問題がある。しかし、この点についても彼らは、次のような Grice (1967, 1975) の例をあげた上で、A が B の発話から「11 時前である」と推論できるのは、B が合理的であると A が仮定しているからであると述べている。

(20) A: “What time is it?”

B: “(Well) The postman's been already.”

このような合理性の仮定 (rational assumption) が存在するからこそ、上の対話は意味を成すのである。MP のモデルを立てる事によって初めて、異なる言語・文化間に共通する言語使用の普遍性を説明する事ができる。これが機能的観点 (語用論) の基本的な立場であり、その目的を実行するための仮定とプロセスは、構造的観点 (統語論・意味論) と何ら変わるところがない。語用論は、MP が言語をどのように使用するかを考える分野である。本稿では、言語使用が形式に反映されるような現象を分析対象としながら、定義しにくいといわれている言語使用を一般化していくという方向で研究を進めたいと思う。

過去の発話を引用するとき、我々は直接話法 (direct speech) で引用する場合と間接話法 (indirect speech) で引用する場合がある。これは、言語使用が形式に反映されているよい例である。本稿では、この直接話法と間接話法の使い分けがどのような原理に基づいて行われているのかについて、機

---

8) Brown and Levinson (1978: 66) は、MP が持っているといわれる合理的能力 (rational capacities) を「目的からそれを達成する手段を推論する能力」と定義している。

能的観点から考察する<sup>9)</sup>。そして、言語使用にみられる普遍性と個別性を、英語など他の言語と対照しながら明らかにしていく。

## 4 言語使用の問題

### 4-1 直接話法と間接話法

間接話法と直接話法の使い分けを考える前に、直接話法と間接話法の区別をどんな基準に基づいて行うべきかを定義しておく必要があるだろう。よく指摘される事実であるが、英語では主節と従属節の間に時制の一致が見られるため、直接話法と間接話法を容易に区別する事ができる。また、英語では引用句を導く働きを持つ接続詞“that”「と」は間接引用句しか導かないので、これを基準にしても直接話法と間接話法を区別する事が可能である。しかし、日本語には主節と従属節の間に時制の一致は存在せず、また日本語で引用句を導く接続助詞「と」は、直接引用句と間接引用句のどちらも受け入れるので、これも区別のための基準とはならない。

そこで、今度は“ ”や「 」などの引用符の有無を基準に、直接話法と間接話法を区別してみよう。引用符を基準とした話法の区別は単純であるが、日本語ではかなり有効な判定基準となる。例えば、次のように引用符のある引用文は、すべて直接話法となる<sup>10)</sup>。

(21) 何しろ私はゾウリムシから「お前ほどの単細胞は見た事がない」と言われた男。(『ダカーポ』1992. 4. 1)

(22) この国では、まだ辛い事をしたり何かを我慢する事が美德となっていて、そういう人達が「おまえは好きな事をやってるんだから、そりゃあ楽だよ」とか言うんだよ。

(村上春樹ポードレスインタビュー『ビュー・ザ・ワーク』1991.)

9) 中園(1994)ではこの問題を発話行為論の枠組みで考察した。

10) このように考える事の利点は、書き言葉だけでなく話し言葉も研究の対象に取り込む事ができるという点があげられる。なぜなら、話し言葉では引用符の有無を確かめようがないため、引用符を基準に設定しては話し言葉における話法の区別を永遠に行う事が不可能になるからである。

11)

- (23) 例えばものすごく好きな女に「あんたなんか嫌い」っていわれた時、自分にもものすごく面白い仕事があるのとないのでは大違いだよ。

(村上春樹ボーダレスインタビュー『ビュー・ザ・ワーク』1991.

11)

- (24) 「小沢は強度のノイローゼで凶暴性をおびている。何されるか分からないから近寄るな」と言われています。

(早川和広『幸福の科学が消える日』アイベックプレス)

また、次のように引用符のない引用文は、すべて間接話法となる。

- (25) 前に私はK氏からローマ時代の軍船の設計者であったという前世も教えられた。その当時の私は海で溺れ死んだと言う。

(『ダカーポ』1992. 4. 1)

- (26) アンタわたしを山梨の川に沈めたいとか言ったそうだが。

(週刊文春「のんき天国」1992. 11. 7)

- (27) ある日私の娘が向こうに呼ばれて、私も来なさいというので行って一緒に飯を食べていた。

(西尾幹二『ヨーロッパの個人主義』講談社)

しかし、古くから気づかれているように、英語にも日本語にも引用符を欠く直接話法が存在する。例えば、英語では次のような例がこれにあたる。

(28) He said, I like it.

(29) Well, Rowe thought, I may as well do one good thing.

(30) Yes, he thought, it is a terrible time.

ただし、現在の英語ではこの形式は廃れ、上のような引用符ぬきの直接話法が用いられるのは、何らかの文体的効果を期待する場合か、心の中の思考や感情を描写する場合に限られる (木原 1955)<sup>11)</sup>。つまり英語では、

11) 木原 (1955) は、(28)~(30) のような用法を不完全直接話法と定義している。

このような引用符ぬきの直接話法は、ごく例外的な用法なのである。しかし、日本語の引用文では英語のように文体的効果に関係なく、ごく自然に次のような引用符ぬきの直接話法が用いられる。

(31) 憤慨しちゃって（犯人を）一回蹴っ飛ばしたんですよ、そしたら警官に今度やったらお前も逮捕するぞっていわれた。

（週刊文春 1992. 6. 11）

(32) お前は美男だと言われるのはうんざりです。

（雁屋哲・花吹アキラ『美味しんぼ30巻』小学館）

この事実から、日本語で話法を判定する場合、引用符「」の有無は有効な基準ではあるが、これは決して本質的な基準とはならない事が分かる。日本語の話法を区別するためには、引用符とは別の基準を求めなければならないのである。

そこで、本稿では、引用文の中の統語現象に焦点を当てて、直接話法と間接話法の違いをみていく。例えば、我々が直接話法であると直観するような(21)～(24)や(31)～(32)では、引用文の中でダイクシスが元の発話のまま用いられている。一方、我々が間接話法であると直観するような(25)～(27)では、引用文の中でダイクシスに調整が施されている。このように、引用文のダイクシスに注目する事により、従来からいわれている直接話法と間接話法の区別はただの疑似的な現象であり、これはダイクシスの調整という言語形式に還元できる事が分かる。

これまで直接話法と考えられていたものは、実はダイクシスの調整が行われていない発話の事である。同様にこれまで間接話法と考えられていたものは、ダイクシスの調整が行われている発話の事である。本稿では、このような引用文におけるダイクシスの調整を、日本語の話法を区別する基準として設定する。だから、「直接話法と間接話法をどう使い分けるか」という最初の疑問は、「どのような場合にダイクシスを調整して表現し、またどのような場合にそれを行わないか」という疑問にいいかえる事ができる

のである。

#### 4-2 ダイクシスの調整

ダイクシスとは、言語と現実世界を結ぶ有力な道具である。例えば、「今」というのは「話し手が言葉を口にしている時間」の事であり、「ここ」とは「話し手が言葉を口にしている場所」の事である。このように、ダイクシスの原点には常に話し手がいる。引用文の場合、ダイクシスの原点となる話し手は、報告者の事を意味する。ここでは、次のような元の発話と引用文の中で、それぞれダイクシスがどのように用いられているのかについて考察する事にしよう。

- (33) a. 「お袋さんはオヤジさんの代わりに君にのぼせ上がってきた」  
b. ちょっと待ってよ、ドク、母さんが僕にイカれたって言うてるの？ (Back To The Future. Part1)

元の発話 (33a) と引用文 (33b) の中で、用いられているダイクシス「君」と「僕」はどちらも同じ人物を指示している。ただし、元の発話 (33a) のダイクシス「君」が元の発話者の視点からみた表現であるのに対し、引用文 (33b) のダイクシス「僕」は報告者の視点からみた表現である点で異なる。これは、引用文の中でダイクシスの視点が元の発話者から報告者に調整されている事を意味する。上で述べたとおり、ダイクシスは話し手を起点とする表現であるから、引用文の中で次のように現在の話し手である報告者の視点にダイクシスを調整するのは、ある意味で当たり前の言語行動である。したがって、これは日本語に限らず、どんな言語にも見られる現象であり、次のような英語でも引用文のダイクシスを自然に調整する事ができる。

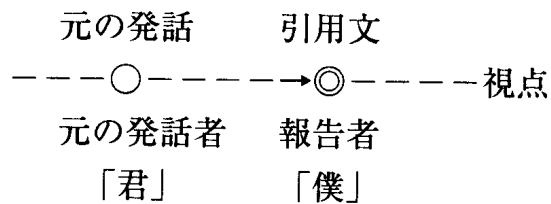
- (34) a. “Apparently your mother is amorously infatuated with you instead of your father.”



- b. Wait a minute, Doc! Are you tryin' to tell me that my mother has got the hots for me? (Back To The Future. Part1)

このような言語使用の普遍性はあるレベルで捉えなければならない。上に見られるダイクシスの動きを図示すると、次のようになる。

(35) ダイクシスの視点移動



この原則にのっとり、引用文の中でダイクシスを報告者の視点で表現している例には、(33) の他にも次のような用例がある。

- (36) a. 「明日公園で遊ぼう」  
b. 今日公園で遊ぼうって友達と約束したから。  
(朝日新聞「ハイあっこです」604)
- (37) a. 「農家の自主性をお前が抑えてきたのではないか」  
b. よく批判されるのは、農家の自主性を私が抑えてきたのではないかという事だ。(朝日新聞「天声人語」1992. 2. 21)
- (38) a. 「あそこに店出せ」  
b. テッチちゃんが、ここに店出せ言いましてん。  
(はるき悦巳『じゃりん子チエ4巻』双葉社)

(36) では元の発話の時の副詞「明日」が、引用文の中では「今日」に言い換えられている。同様に、(37) では人称代名詞が「お前」から「私」へ調整されている。また、(38) では指示詞が「あそこ」から「ここ」へ調整されている。

しかし、日本語の引用文を詳しく観察していくと、引用文の中でダイクシスを報告者の視点に調整せず、元の発話者の視点のままで表現している引用文も、数多く観察する事ができる。例えば、次のような場合である。

- (39) a. 「お前は才能がない」  
 b. でも、テープを送ってもしダメだったら。要するにお前は才能がないって言われたら。(Back To The Future. Part1)

ダイクシスは話し手を起点とする表現であるのに、(39) ではダイクシスが引用文の中でも元の発話者の視点のままにされていて、現在の発話者である報告者の視点に調整されていない。このようなダイクシスの未調整は任意に行われているのではなく、必然的な言語行動である。なぜなら、もしここでダイクシスを調整したら、次のように不自然な引用文となるからである。

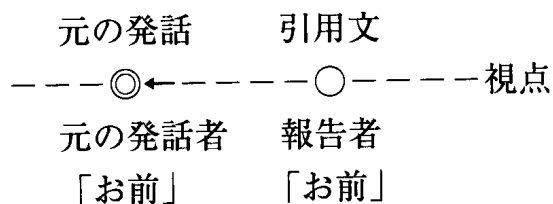
- (40) ? 要するに私は才能がないって言われたら。

また、このような制約は日本語だけに当てはまり、英語などの言語には当てはまらない。例えば、次のような英語ではダイクシスを自然に調整する事ができる。

- (41) a. "You are no good."  
 b. I mean, what if they say I'm no good. (Back To The Future. Part 1)

したがって、これは日本語に固有の制約であるといえる。この日本語の引用文にみられる視点の制約をまとめると、次のようになるだろう。

(42) ダイクシスの視点制約



この制限にしたがって、引用文の中でダイクシスを報告者に調整せず、元

の発話者の視点から表現している例には、(39)の他にも次のような用例がある。

- (43) a. 「あなたは美男だ」  
b. お前は美男だと言われるのはうんざりです。  
(雁屋哲・花吹アキラ『美味しんぼ30巻』小学館)
- (44) a. 「今度やったらお前も逮捕するぞ」  
b. 憤慨しちゃって(犯人を)一回蹴っ飛ばしたんですよ、  
そしたら警官に今度やったらお前も逮捕するぞっていわれた。  
(『週刊文春』1992. 6. 11)
- (45) a. 「君は国を守ろうと思わないのか」  
b. 米国に行くと、君は国を守ろうと思わないのかと叱られる。  
(西沢潤一『私のロマンと科学』中公新書)

これらの例で、元の発話の人称代名詞「お前」や「君」が、引用文の中でも調整されず、元の発話のまま用いられているのは、ダイクシスを調整したら不自然になるからである。

## 5 ま と め

ダイクシスの調整は、話し手の場所や時間といった言語外の要素を考慮にいれなければならないという点で、言語使用の領域に属する問題である。本稿では、引用文におけるダイクシスの調整を中心に話法の問題を考察していく。過去の発話を引用するとき、引用文の中のダイクシスは報告者の視点に調整できるのが普通である。これはどのような言語にもみられる現象であり、この普遍性はあるレベルで捉えなければならない。しかし、日本語にはそれが引用されてもダイクシスを調整できない発話が存在する。この制約は日本語だけに当てはまり、英語など他の言語には当てはまらないため、日本語に固有の制約であるといえる。

参 考 文 献

- Austin, J. L. (1962) *How to Do Things with Words*. Oxford University Press.
- Brown, P & Levinson, S. (1978) "Universals in Language Usage: Politeness Phenomena." *Questions and Politeness: Strategies in social interaction*. Cambridge University Press.
- Brown, G. & Yule, G. (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge University Press.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press.
- Cook, V. J. (1988) *Chomsky's Universal Grammar: An Introduction*. Blackwell.
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院
- Grice, H. P. (1975) "logic and conversation." Cole and Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech act*. Academic Press.
- 鎌田 修 (2000) 『日本語の引用』ひつじ書房
- 木原研三 (1955) 『呼應・話法』研究社
- Leech, G. N. (1983) *Principles of Pragmatics*. Longman.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院 (復刊 (1972) くろしお出版)
- 中園篤典 (1994) 「引用文のダイクシス」『言語研究』105号
- Ross, J. R. 1970. "On declarative sentences". Jacobs and Rosenbaum (eds.) *Reading in English Transformational Grammar*. Ginn.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
- 砂川有里子 (2001) 「引用」中村明 (編) 『現代日本語必携』學燈社

## Summary

### Language Usages in the Theory of Linguistics

Atsunori Nakasono

In the rapid development of syntactic theories over the past two decades, we can distinguish two very different main streams. One is concerned with the study of the sentence forms in isolation while the other is concerned with the study of sentence forms in relation to their non-linguistic contexts. In an earlier paper (Nakasono 1994), I raised the possibility that the second approach (a speech acts theory) might provide a systematic partial reduction of the restriction of pronouns in quotations; the brief outlines is given in Section 5 but the detail will be found in the earlier paper. The properties of the account are significant in that the linguist can confront little direct evidence, so that it is reasonable to assume that they reflect deeper principles of speech acts.

In this paper, I want, first, to show how the account might be further justified and extended. Second, I shall attempt to show the linguistic data in our surroundings.